

サビエル誕生五百年



洗礼記念日

三月二十八日に日本を出発。ドイツのフランクフルトを経てフランスの聖地ルルドで二泊。

そこからはバスで、ピレネー山脈を越えてスペインへ。フランススコ・サビエルが生まれたサビエル城を見

て、県都パンプローナで一泊。イエズス会の創立者イグナチオ・ロヨラが生まれたロヨラ城を経て、世界遺産の大聖堂があるブルゴスに着いたのは四月一日であった。

た。一方、私は結婚して七年目、三十二歳の時の受洗で、妻の洗礼記念日、四月一日に合わせて私も同じ日に受洗したのである。

〈洗礼の意味〉

洗礼とは、キリスト教信者になる入信の儀式で、昔は全身を水中に浸したが、今は洗礼台の上に頭を差し出し神父がその頭に聖水を注ぐ。

水の中に沈められることはキリストとともに葬られるという意味で、その後キリストが復活したように、我々も新しい命に生きる：つまり、今までの古い自分は死に、新しい自分として生きるという儀式で、教会共同体の一員になるのである。

〈代父・代母〉

もうひとつ、受洗後信仰の道を正しく歩み続けるように、先輩の信者さんに代父(女性の場合は代母)になってもらうのである。昨年、徳山教会出身の青年が神父になった。現在、宮崎教会におられる内藤恵介神父で、私も叙階式にはお祝いに駆けつけた。夜、祝いの酒を飲みながら「ところで、神父様の代父はだれですか?」と尋ねた。

内藤神父は一瞬、絶句され、笑いながら「藤屋さんですよ」と言われた。私がお祝いで質問したと思われたようだが、自分が代父であること、を本当に忘れていたのかもしれない。しかし、忘れていてもお祝いにいったのだから、神の計らいはすごい。

以来、内藤神父は洗礼を授ける際、代父、代母はきちんとした人を選ぶように注意しているに違いない。さて、ブルゴスのホテルでの夕食の際、ワインで巡礼団全員から洗礼記念日を祝ってもらった。午前中、パンプローナのヘミングウェイの小説「日はまた昇る」に何回も出て来たカフェ、イルーニャ(元山口放送取締役ラジオ局長)



洗礼記念日をヘミングウェイの小説で有名なパンプローナのカフェ「イルーニャ」で祝う



神父になって初めてのミサで

御聖体を授ける内藤神父

実は四月一日は私たち夫婦の洗礼記念日。と言って、二人でも、二人で同時に洗礼を受けたのではなく、妻は十九歳の大学生の時、山口教会で受洗し

洗礼の際、洗礼名(クリスチャン・ネーム)をもらう。信仰の範を示した聖人の名をつけることが多い。妻の洗礼名はマリア・ルルド。誕生日の二月十一日はルルドに聖

マザー・テレサが来日した時「愛の反対は憎しみではありません。無関心です」と言われたが、誕生日、結婚記念日などの記念日を大切にすることは、家族や友とのきずなを深めるもので、相手への関心のあらわれである。

マザー・テレサが来日した時「愛の反対は憎しみではありません。無関心です」と言われたが、誕生日、結婚記念日などの記念日を大切にすることは、家族や友とのきずなを深めるもので、相手への関心のあらわれである。

(元山口放送取締役ラジオ局長)